

非常に多からうと信じて居ります。で私は私の小供のとき、お寺まゐりに連れていかれたその當時所謂小供心に感じました一節を擧げて、みなさんの子どもを教へ導かるゝ参考に供することかくの如くでございます。

(完)

母と子と繼母 (承前)

林 壽 祐

余は幸にして父母共に健全なるも余が父、祖父及び其弟妹等は幼にして母に後れ、繼母に督せられ備さに辛酸を嘗む、親族中にも母を失ひ往々悲哀の境遇に沈みし者少からず、其言を聞くに皆符を合すが如し。釣落したる魚は實物より遙か大く思はるゝ如く、母存生せるときは左程に思はざりしも母の逝かれた後には一層難有思はるゝなり、

往々憂きにつらさに遇ふ時は「嗚呼母が生きて居るならば……」の嘆息を發せらるゝ事幾度ぞ。

四十八

母に後れたる子は唯にてさへ困難するに、まして意地悪しき繼母に遭遇せんか、其艱難といふものは一通りや二通りの騒ぎに非らざるなり。予の親族に暴れ坊あり活潑にして物に頓着せざる性なるが、一日言會々彼が亡母に及びし時彼は涙に眼をうるませ、物をも言はず頗るしよけかへりたり蓋し繼母と繼子は常に親睦し難く、互に猜疑を起し一言一動に角をたて、欠點を拾合ひ針程の事を棒程に擔き出し恰も仇敵の如くなるを常とす、是を以て性質強剛なる者は漸々と悪性に曲向し、柔弱なるものは恐々慄々憂鬱の餘り神經病を惹起しあつたら此月日を不愉快に徒費するものあるに至る。彼の惘然なる狂人の如きは比較的親なし子に

多く有らんかと思はるゝなり。

されど繼母たるまた随分つらさものなり、已の子なれば小言をいふとも、少し位無理なることを爲すも、人も咎めず小供も恨みず已れも平氣なり然れども繼母となると餘程六ヶ敷なり、食物より衣服言語まで直に世評に上り、枝より枝つき繼母は酷いとか邪見だとか隔てるとか餘計に憎まれ勝なり。子も動もすれば曲りくねり、故更に悲哀の状を粧ふなど其を一々氣にするに於ては、遂に已れの身を損ずるに至るべし。而し又繼母は已れに子なき時は務めて先妻の子に意を注ぐも、已れに子の生ずる時は即之を疎遠に取扱ふもの多し是れ婦人の欠點なり。また少しく枝葉に亘れど婦人の欠點の一例を擧げん。凡そ姑たるものは已れの最も愛する忤の妻を恰も讎敵の如く思ふにゐるなり

嫁にも頗る非道の者あれども、兎に角已れの娘となり終身衣食住を共にするものなれば、嫁に悪しき所あれば人知れず之を教訓し、懇に示導するこそ姑の本務なれ、苟も言語に跌きあるか、作業に拙劣なる所ある時は、喜んで誹謗の材料と爲し、淺猿ましくも他人に觸れ廻はすものあり。常に温厚なる婦人も姑となる時は、多少猜疑心に化成するものなり。是に於てか嫁せんとするものは、姑の無き所即ち天にも地にもたつた一人の至重至切の母を失ひ人世快樂の一大部分を削減せらるる、不運不幸の夫を擇ぶに至る是れ豈に奇々怪々の現象にわらずや。

今東京に遊學せらるゝ諸嬢の中には、必ず母を失ひしもの有らん。さなきだに涙脆き他郷の客、社會の人は冷淡に郷里の繼母は無情なるにつけ餘

るに亡母を憶出だし、悲哀やるせなく天を仰ぎ地に俯するの嘆なからざるを得ざるものあらん。

母なし子の一生不運の底に沈むを見るにつけ現に母となれる人、及び後來母と成らんとする妙齡の諸氏は、身体を健全にすべきこと第一の要務なり。一朝不幸にして妻たり母たるものが彼の世に逝去らんか、唯に辛酸を其最愛の子女に遺すのみならず、其夫其親に於ても非常なる失望と困難を受けしむるものにして、一家團樂融融たる和樂は忽ち消散し、悲風慘愴宛がら暗夜に火の消へたるか如し、是を以て婦女たるものは尙も攝生を怠るべからず、近來物價騰貴に従ひ診察料及び藥價は非常に高値となりければ、貧賤なるものは醫藥を服する能はず、病症の如何を知る能はざるに、狼狽に賣藥などを用ひ不知不識の間に貴重なる生命を損

するもの珍しからず、豈慨嘆の至りならずや。然れども吾人は婦女子の健全を冀ふといへども、また彼の佞姦にして無情なる婦女はドシク息滅し其悪性を遺傳する子孫繁殖の途を切斷し、速に此社會より悪性的人間を根絶へせんことを欲するものなり。

太陽の光鮮かに世界は漢々として廣し、二手二足の動物は幾万幾億となく其間に活動し、笑ふものあり、喜ぶものあり、怒るものあれば躍るものあり、千差萬別口言ふべからず、筆記すべからざるも、幼にして母に後れたる程、人世の大不幸はなし、是れ人は感情的動物なればなり、觀よ憂さも嬉しさも皆彼等か涙の種、彼等は將來如何程立身出世するも決して満足の人といふべからず、思はうて是に至らば世の母たるもの充分攝生を戒め其

身を大切にせざるべからず。また子たるもの貴賤
 貧富を論せず、永く此世の快樂を享けんと欲せば
 宜しく身体を健全にし、能く業務を勉勵し、以て
 至仁至愛たる母の心を安んぜざるを得んや。

(おはり)

Look in fear upon the guilt that
 might have been thine own.

恐を以て、己の陥らんをせし
 罪惡の上に眺めよ。

夏の家庭



や、て、

團 樂。ストーブの下、火鉢の邊、快談相親しむ
 冬の家庭は、げに温かきものなるも、夏の家

庭亦一入のものにして、今や正に盛夏。學校は凡
 て休暇となり、笈を遠くに負ふの子弟も歸省し、
 一家團樂、綠翠滴たる樹蔭、涼風送くる窓下、あ
 どけなき幼兒の御伽話、活氣はやれる青年の夢想
 或は希望を語るあり、或は經驗を述ぶるあり、子
 女の進歩は其の話頭に表はる、家庭の幸福和樂何